

出張先のホテルで露出オナニーをSNSで実況した、  
変態マゾOLの独白（ノンフィクション）

「ホテルの廊下で、丸見えの窓辺で。  
お題に添ってフオロワーさんに  
変態露出オナニー実況しました」

この作品は、裏垢女子「わんこさん」が2021年3月に実施した、ビジネスホテルでの露出プレイを素に書き起こしたノンフィクション・ノベルです。文中に出てくるツイッターでの実況中継は、彼女の投稿ほぼそのままです。

当時の投稿をまとめたモーメントはこちら。

<https://twitter.com/i/events/1374748448910581765>

わんこさんをテーマにした前作はこちらです

<https://www.amazon.co.jp/dp/B08ZHDS6YG>



4、3、2……と、下へ移動していたエレベーターの階数表示は、「1」で止まると、そのまま動かなくなりました。

目の前のエレベーターの扉にあるそれを、私はじっと見つめます。

深夜のホテルの廊下はひんやりとして、浴衣一枚羽織っただけの素肌には、鳥肌が立ちそうです。

そのくせ体の奥からは、なにか熱くたぎるものがふつつつと込み上げ、子宮をズキズキと甘く疼かせるのでした。

……どれくらいの時間が過ぎたでしょう。  
数秒？ 数分？

一階に停まったまま動かないエレベーターの扉を見据えながら、私はゆっくりと浴衣に手をやります。

帯を解き、下着を着けずにまとった薄布一枚の前開きを掴んで、ゆっくりと左右に広げます。

シャワーを浴びたばかりの素肌は、ぽおっと赤く上気するほど火照っていました。

まだお嫁入り前の、社内では一応「若い女の子」と呼ばれるOLの、浴衣を開いた裸体。

それを閉じた扉に見せつけるように、私はゆっくりと膝を曲げ、腰を落とします。

がに股のポーズ。

若い女の子がとるにはあまりに破廉恥な格好です。普通の娘なら、「しろ」と命令されただけで、その場に泣き崩れてしまうでしょう。でも、私は……。

（はああ……）

誰もいない廊下に、発情したメス犬の喘ぎ声が、漏れ伝います。

このメス犬ときたら、はしたないことに、なにかといえはこのポーズをとるのが大好きなのです。

いまもこうして、曲げた両膝をガクガクと震わせ、顔を真っ赤にして興奮に酔いしれているのです。

がばりと開いた股間の付け根からは、いやらしい匂いを放つメス汁が、奥からこんこんとあふれてきます。それは太ももをツーツと伝い、剥き出しの素足を汚していくのでした。

誰が通り掛かるかわからない、ビジネスホテルのエレベーター前。部屋にあつた薄い浴衣の前を開いて、私はみずみずしい若い女体を晒し続けました。

まるで、その開かない扉を、挑発するかのように。

もしいま、いきなりエレベーターが上がってきてこの扉が開き、中から酒に酔った宿泊客の男性たちが現れたら。

そして、こんな変態露出をしている私に驚き、その後ケダモノのよ

うに襲い掛かってきたら……。

（あああ、はあああ）

狂ったように股間を蹴り尽くしたい衝動を、私は必死で抑えました。  
ビクンビクンと体が痙攣し、膝が崩れそうになるのを、必死にがに  
股の体勢でこらえます。

（こんな、見られるかもしれない状況で、イクのを我慢するのって…  
…）

死ぬほど気持ちいい。

いまこの瞬間にも動き出すかもしれない階数表示を見上げながら、私は今日ここに来るまでのことを、思い返していました。



「出張、ですか、私一人で？」

「不安かね。たしかに君のような若い女性社員を単身で現地に派遣させるのは、あまり例がなかったかもしれん」

ギシリと音を立てて椅子の背にもたれると、上司はどこか面白そうな目で私を見上げます。



「だが、君なら大丈夫と踏んだんだよ。君は営業補佐として申し分ない働きをしてきているし、優秀さは誰もが認めるところだ。今度の出張も問題なくこなすと確信しているんだよ。私も、役員も」

「あ、ありがとうございます」

この人がもし、私の裏アカでの活動を知ったら、どんな顔をするんだろう。

「みんなのオナホール」を公言し、夜な夜な男の人たちにイメージプレイで犯されまくっている「わんこちゃん」が、その自慢の部下の正体だと知ったら……。白目を剥いて卒倒するかもしれません。

「頼んだぞ。現地の担当者に君の優秀なところを、存分に見せつけて

やってくれ」

見せつけてやってくれ……。

その言葉を聞いた瞬間、私の中でパチン、となにかのスイッチが入りました。

いつも仕事中は封印している変態メスマズとしての自分。子宮から脳へと続くその特別な回路が、いま思いがけなくながったのです。

知らない土地で、一人きり？

なにをしたっていい。

思い切り大胆になっても、誰も咎める人はいない。

「宿泊先はここだ。いつも我が社が使っているビジネスホテルのシングルルームを使ってくれ。話し相手がいなくて退屈かもしれんが、まあ、日頃の疲れを癒す機会と思って……」

上司の言葉が右から左へ耳を通り過ぎていきます。

ホテルのパンフレットの、いかにも機能重視の施設や部屋の写真を見つめる私の体は、甘い期待に小さく震えていたと思います。

腰がジーンと熱くなり、下腹部に血が集まってきます。子宮の奥がズキズキと疼きはじめました。

このホテルで一晩、なにをしたっていいんだわ。

廊下で露出しようが、窓に向けてオナニーしようが。

ぶるっ。

ゾクゾクとした期待感が背中を駆け上がり、私は思わず身を震わせました。

周りのみんなが忙しく働いている職場で。上司の目の前で。

「おい、聞ってるのかね？」

「あ、すみません。ええと、これが当日の資料ですね？」

真面目な顔で資料を受け取りながら、頭の中には既に、部屋で一人きり窓に向けて開脚オナニーをする自分の姿が浮かんでいました。

仕用のスーツのスカートの奥はもう、じつとりといやらしく濡れはじめています。



そして、当日。

キリツとしたビジネススーツに身を固め、隙のないできるOLの顔で出張に赴いた私は、現地でバリバリと業務をこなし、上司が見たら満足げに頷くような仕事ぶりで初日を終えました。

終了後、担当さんからの食事の誘いを丁寧には断ると、私は手早く食事を済ませ、チェックインしているビジネスホテルに早々に戻ってきました。

さてここからが、今回の出張のメインイベントです。

シャワーを浴びて一日の汗と仕事モードを洗い流すと、裸のままシングルルームの半分を占めるベッドに上がり、枕元のコンセントで充電していたスマホを取り上げました。

出張に向かう際、ツイッターのフォロワーさんたちに呼びかけて、今日のこれからについて「お題」を募集しておいたのです。

「今夜泊まるホテルで、露出しようと思います。どんなふうになれば良  
いか、皆さんアイデアをくださいね」

思いがけずたくさんの指示が、DMに届いていました。

とても実行できそうにないものもありましたが、これは試したいと  
いうものも、ちゃんとあります。

それらを整理し、行動予定を頭の中で整理して、これからやること  
をシュミレーションすべく、目を閉じて想像してみました。

……たまんない。

早くもゾクゾクと鳥肌が立ちはじめた素肌に、  
備え付けの浴衣をま  
とって、私は洗面所に向かいました。

いよいよ、行動開始です。





【お題1…ホテルの部屋を出て、裸に浴衣一枚の姿で廊下を歩いてみて】

この「お題」は予想通りです。というより、指示されなくても、そうするつもりでした。

誰も私を知る人がいない土地ですら、いままでにしたことがないほど恥ずかしいことをしようと決めていたのです。

会社がつてくれていたビジネスホテルの廊下で、昼間バリバリ仕事をしていた有能な女性社員が、ふらふらと恥ずかしい露出姿で歩いている……。

こんなギャップの激しい変態行為があるのでしょうか。

意を決すると、ごくりと唾を飲み込み、ドキドキしながらスマホに

文字を打ち込みます。

**「これから裸に浴衣一枚で、ホテルで露出プレイします」**

ツイッターでみんなにそう告げた後、私は洗面台の鏡をじっと見つめながら、羽織ったばかりの浴衣の帯を解き、ゆつくりと前を開いて、自分の裸体を見ながら、さらにツイートします。

**「いま裸に浴衣だけ羽織って、洗面台の鏡に自分を映してます」**

これまでいくらフォローワーさんに頼まれても、絶対に画像をアップしなかった、私の裸体。

それがいま、すぐ目の前にさらけ出されています。浴衣の前をだらしなくはだけた、いやらしい格好で。

ツイートを目にしたフォロワーさんたちは、私のいまの姿を想像して、めっちゃくちや興奮してくれているでしょう。

男子なら誰もが見たいこの姿を、いま私だけが見てる。  
そしてこれから外に出たら、全然知らない人にそれを……。

見られてしまうかもしれません、  
千人以上いるフォロワーさんたちがいくら望んでも見られない、私の恥ずかしい姿を。

(やば。興奮すごい……)

思わず熱い吐息が漏れてしまいます。

鏡に映った私の顔は、興奮で頬が紅潮していて、心なしか瞳が赤く潤んでいます。

(誰、このいやらしい女)  
そうつぶやきたくなるほど、こちらを見つめる私は、発情したメスの顔になっているのです。

空調は効いているのにぶるぶると身を震わせながら、私は用意してきた小さな容器を、洗面台に置きました。

【お題2…ホテルでオナニーするとき、普段しないようなことをしましょう。メンソレータムを使うとか】

「出張先にメンソレータム持ってきました……これから乳首の周りと、  
脚の付け根に塗ります」

皆さんへの報告を終えると、震える指で蓋を開け、すくい取ったその軟膏を、自分の敏感な部分へと近づけます。

（あ、これ、すごい……）

乳首に直接塗るのは怖かったので、その周りの乳輪に、円を描くように、ぐるりと塗り込めます。

すぐに、スースーとする揮発性の爽快感が患部に広がっていきます。

痛いのも熱いのも違う、冷たい刺激。とくに胸が強烈でした。乳輪にたくさん浮いているポツポツの全部に粘液が沁み通り、スースーとしていたはずが次第にヒリヒリと強い刺激に変わっていくのです。

かといって、それは決して不快ではなく、なんていうか、刺激がそのまま下腹部へと降りて、子宮をジンジンと疼かせるみたいです。

メンソレータムってオナニーに使えるんだよ、と言われた意味が、いまようやくわかりました。

(ヤバイ……これヤバイよお……)

胸以上に過敏な神経が集中している股間に直接塗るのは、さすがにできなかったので、蕩け始めているオマ×コから少し離れた脚の付け根に軟膏を塗りました。

それでもかなり強烈な刺激が伝わってきて、ただでさえぐずぐずに蕩け始めているオマ×コは、ズキズキと疼いてしまうのでした。

この状態で、これから部屋の外に出るの？

「塗りました……鏡の前で裸で立って、スースーするのを感じてます



……」

知らない土地のホテルの部屋で、私、こんなことしてる！

そう考えるだけでもう、頭がクラクラしてきます。

初めは怖いと思っていた露出プレイが、次第に楽しみになってきました。

鏡の私は、とてもいやらしい顔をしています

【お題3…全裸に浴衣一枚だけ羽織って、ホテルの廊下を歩いて】

「これから部屋の外に出ます」

皆さんにそうツイートすると、はだけていた浴衣の前を合わせて帯を結び、シングルルームのドアへ向かいます。

手にはスマホ。露出をツイッターで実況中継するためです。そして浴衣のポケットには部屋の鍵。もし忘れて外に締め出され、ホテルの人が来る羽目になったら、間違いなく人生が終わってしまいます。

それでもいいかな。

ふとそんな思いがよぎって、慌てて首を振りました。

裏アカのわんこちゃんキャラではしばしば破滅願望を口にしてるけど、現実になったら洒落になりません。

おそるおそるドアを開けたホテルの廊下はひんやりとして、想像よりもほの暗く、シンと静まり返っていました。

行き交う人は誰もいません。でも、いつどこのドアが開いて誰かが出てくるかわかりませんし、エレベーターがチンと鳴って、開いた扉からわらわらと人が歩いてくるかもしれないのです。

（本当にやるの？ この格好で、廊下の往復なんて……）

膝がガクガクと鳴りはじめました。

好奇心から思い立って、ツイッターで実行を宣言した露出プレイですが、いざ本当にやるとなると、自分がとんでもない行為をしようと

していることを、改めて実感します。

「興奮すごい……これ男の人だったら、オチ×ポ立っちゃってダメなやつだ……」

そうツイートすると、意を決して部屋を出てドアを閉め、ゆつくりと歩き出しました。

（大丈夫。ただ浴衣の女の子が廊下を歩いてるだけ。傍目にはなにもおかしくないわ）

でも、その薄い浴衣のすぐ内側では、若いメスの女体が興奮ではち

きれんばかりになっています。

心臓はドクドクと乱打して、いまにも口から飛び出そうです。3月下旬の肌寒さにも関わらず、布地がこすれる内側の素肌は熱く火照り、もしいま剥ぎ取られたら、きっと全身が桃色に火照っているのがわかるでしょう。

廊下の長さは意外とたいしたことはなく、すぐに端まで歩いてしまいました。

その突き当たりには大きな鏡があって、私がいる廊下全体が映っています。

これに注意していれば、たとえどこかの部屋のドアが開いても、すぐにわかりそうです。

その鏡に向かって、私はゆっくりと足を進めていきます。

胸と股間は相変わらずメンソレータムのせいでスースーしていて、普通に歩くだけでも、その刺激で声が漏れてしまいそうです。

間接照明の灯りに導かれ、シンと静まった廊下のいちばん奥、全身が映る大きな鏡の前まで来ました。

目の前で、スマホを手にした浴衣姿の女の子が、こちらを見つめています。

その顔は興奮で赤く火照り、瞳がうるうると潤んでいました。

誰かに見られたらおしまいだというのに、リスクを冒してこんな変

態プレイを楽しんでいる、どうしようもないマゾのメス犬。

その本性を、鏡の自分に突きつけられた気がしました。

（あなたはこれを望んでいたんでしょう？　だったら最後まで楽しまないと）

そう言っつて、もう一人の自分がくすりと笑ったように見えました。

とにかく、バレないようにしないと。

手にしたスマホを見ているふりをして、壁や天井をさりげなくチェックします。

よし、監視カメラはないみたい。もしあったら、さすがにヤバかったけど。

鏡の前で浴衣の帯をほどき、ゆっくりと前を広げました。

はだけた素肌にひんやりとした空気を感じながら、震える指でスマホのスイート画面に文字を打ち込みます。

「壁一面が鏡になっているその前で、浴衣を広げておっぱいとオマ×コを晒しました……」

そう入力しながら、だんだん自分の息が荒くなっていくのがわかります。

（会社の皆さん、ごめんない。部屋をとっておいてくれたホテルで、



昼間バリバリ仕事をしていた女性社員が、夜はこんなふうに変態プレイをしてるの。スースーする胸とオマ×コを晒すと気持ちいいの……)

晒しましたのツイートに、フォロワー男子たちから次々とリプライが送られてきました。「変態!」という蔑み。「もつとやれ!」という煽り。「いいね」の数が見るみる増えていきます。

それに突き動かされるように、私はさらにツイートを続けます。

「いまから廊下にある鏡の前で、浴衣の前はだけに変態露出狂ポーズします……♡♡♡」

改めて大きく浴衣を広げ、脚を開いて腰を落としました。

大好きなポーズ。オナニーするときにもする屈辱の格好。  
いやらしく股間を突き出す、がに股の体勢です。

（ああ、私、こんなことしてる……仕事で来た街のホテルで、変態ポーズをとって感じちゃってる……）

膝を曲げて少し下げている腰が、勝手に前後に動いてしまいます。  
がばりと浴衣を広げた女の子が、オマ×コ丸見えの腰を前後にへこへこと振っている……。

その情けない姿を、目の前の大きな鏡が容赦なく映し出しています。

（ダメ、感じちゃって止まんない。ここでめいっぱい露出しちゃいた

い)

1秒が永遠に感じられるほどの高揚感。  
それをできるだけ感じていたくて、私は時計の秒針に目をやりました。

鏡のおかげで、誰か来たらすぐにわかります。一瞬で身支度を整えれば、大丈夫、バレないはず。

だからもう少しこのまま……そう、10秒……20秒……。

頭の中で血が沸騰しそうでした。

廊下のひんやりした空気に晒された素肌全体が、性感帯になったみたいでした。

メンソレータムに犯された乳首をヒリヒリと尖らせて。

がに股で隠すところなくぱっくりと開いたオマ×コを蕩かせて。

私は鏡の前で、半ば昇天していました。

この快感に比べたら、いままでの他のプレイなんて、遊びみたいなものです。

「30秒も露出しましたっ…♡♡♡♡めっちゃやばい、やばい…♡  
♡腰動く…♡♡♡」

もはやハート以外にどんな言葉を打ち込んでいるかわからないまま、かろうじてツイートボタンを押します。

送信しました、の表示に少し理性を取り戻した私は、慌てて浴衣の前を掻き合わせ、急いで帯を結んで鏡の前から離れます。

まだ心臓が口から飛び出そうなのドキドキを抱え、廊下を戻りながらスマホを操作します。

**「浴衣ふつうにもどしたけどちゃんと人間のフリできてるかな…」**

もしいま誰かとすれ違ったら、「なに普通の女の子のふりしてるの、変態メスマゾちゃん？」

そう言われてしまうかもしれません。

きつと全身から変態オーラをムラムラさせながら、私は自分の部屋へと戻り始めました。



【お題5…エレベーターの前でドアが開くまで、浴衣を開いて】

部屋に戻る途中、廊下に面してエレベーターがあります。

もしこのフロアにある部屋に宿泊客が戻ってきたら、その金色の扉がチン、と開いて、私は鉢合わせしてしまうのです。

それでも出されたお題には従わなくてははいけません。深夜のエレベ

「ター前で浴衣を広げて裸体を晒すという、変態マゾの痴態をフオロワールの皆さんに露出報告しなくてはいけないのです。」

いえ、実はお題はあくまで言い訳で、本当はこんなとんでもなく破廉恥なことを、私自身がいちばんやりたがっているのです。

「エレベーターの前きました…♡♡いまからエレベーター動くまで露出します…♡♡う…ごいたらすぐ部屋に上げこむ…♡♡」

震える指でそう打ち込むと、改めて周囲を確認します。

監視カメラがないことはチェック済みです。もしフロアの誰かが部屋から出てきても、先ほどの奥の鏡に注意していれば、サッと浴衣を閉じて誤魔化せます。自分の部屋が近くにあるので、いざとなればす

ぐに駆け込めばいいし。

（つまりこの扉が開かない限り、ここでもいくらでも大胆なことができるんだわ）

ドキドキドキ。

震える指でさつきと同じようにするりと帯を解き、浴衣の前合わせを掴みます。

くいつ、と大きく開きました。まだ余韻で硬く勃起している乳首と、ふとももまで愛液を垂らしている股間の割れ目が、エレベーターの前にさらけ出されます。



（ああ、またやつちやった……見られたら人生終わっちゃうやつ……）

目の前にある金色の扉には、うつすらと変態な私のシルエットが映っています。

扉の上部にはデジタルの階数表示があり、「1」で停止したまま動こうとしません。

こんなこと、さすがにヤバ過ぎるから、一瞬だけ露出してすぐ部屋に戻ろう……。

そう考えていたはずなのに、いざ露出してみると刺激が強すぎて、気持ち良過ぎて、引き際のタイミングが掴めません。

もうちよつとだけ……まだ大丈夫だから……。

そうやってズルズル引き伸ばすたび、うずうずしているオマ×コからは、いやらしい愛液がたらたらとあふれてきます。

**「さっきとちがつてあしはとじてるけど……♡♡♡扉あいたら……♡♡」**

そう、もしいまこの扉が開いたら。

そう思うだけで我慢できなくなつて、狂ったようにオマ×コを激しく弄びたくなります。

私の人権を天秤に掛けた、人生最大のオナニー。

頭のとっぺんから突き抜けるほどの快感が、背中をビリビリと駆け

抜けていきます。

（ああ、はあああ）

我慢できなくなって、脚をがばりと開きました。

例の大好きな股のポーズです。さすがにこんなところではできないと思っていたのに、したくてしたくて我慢できませんでした。

「ちょっとだけ…がにまた…♡♡」

ああ、いつ開くかもわからない扉の前で、いちばん下品な自分を晒したい！

見られたら人生詰むスリルのせいで、びちゃびちゃになっているこのチヨロメスマ×コを、扉があいた瞬間、思いきりぐいっと突き出したい！

ぼんやりと私のシルエットが映る扉は、ひっそりと沈黙しています。上にある階数表示も、ずっと「1」のまま動きません。

それでも、もし誰かに見られたらという不安は、完全には拭い去れません。

いまこの姿を見られたが最後、私の人生は終わってしまう。それは、ああ、なんて甘い破滅なのでしょう。

エレベーターの前でがに股で、くいつと突き出した腰がへこへこ勝手に動きます。

ぱっくりと割れた縦の亀裂の周囲で、自分の指が好き勝手に暴れています。

ぐちゃぐちゃと卑猥な音を立てながら、充血してたかれたピラピラの内側を、狂ったように掻き回してしまいます。

クリトリスはもうパンパンに膨れ上がっていて、どうかすると小指の先くらいに肥大していました。

ゴリゴリと激しい指の動きを押し返すほど、それは包皮をプルンとめくりあげて、異常な勃起をまるで誇っているのようでした。

（クリチンポ、クリチンポ気持ち良くて止まんない）

指を動かすたびに愛液が飛び散り、床の絨毯に滴を撒き散らします。後で気づいたスタッフさんが見て、もし女の子の淫汁だと分かったら、どんな顔をするでしょうか。

（イク……破滅するの想像すると……惨めで完全敗北で、一生取り返しがつかないと思うと……）

でも、さすがにそれはしちやいけない。ここでイキ果てたら、私もう、人間に戻れなくなっちゃう……。

最後に残った理性の欠片が、頭の隅でそう告げています。

(あああ、イキそう……ダメ、こんなところでイっちゃ……)

スマホでツイッターの入力画面を開くと、何度も失敗しながら文字を打ち込みます。

**「イキそう。部屋に戻ります」**

そして自分の体を引っ剥がすように、エレベーターから離れました。階数表示がどんどん上がって扉が開く寸前までいたかった……そんな未練を抱えながら。

部屋に戻ってドアを閉め、鍵をかけると、へなへなと床に膝を突きました。

(すごかった……)

体がまだ下腹部の奥からズキズキと疼いて、しばらくそこから動けませんでした。





【お題6…エレベーター露出をした後の体を部屋の洗面所に映して、自分の顔と体がどれだけいやらしくなってるか、教えて】

ドアの前にへたりこんでしばらく経つと、ようやく少し落ち着いてきました。

改めて鏡に自分を映す、というお題を確認して、再び洗面台へと向かいます。

再びそこに立った私は、部屋を出たときとは全然別の顔をしてしました。

未知の体験にドキドキしていた顔は、いまやねっとりと絡みつくような妖女のように、まるで媚を売るような目付きになっています。

紅潮した頬。濡れた半開きの唇。

まさに発情したメス犬という言葉がぴったりの、いやらしい女そのものです。

誰にも見られていない、廊下を往復しただけの行為。それが私を、こんなにも妖艶にしたなんて。

いまのこの淫らな私を、皆さんに伝えなきゃ。

「ちくびんっぴんになってます…♡」

それは興奮と、薬効のせいでした。

「すーすーで乳首すごい意識しちゃって、じらされるみたいな快感がすごくて、がちがち…」

露出の前にメンソレータムを塗って、とお題で言われたときは、正直なにそれって思いました。

でも実際使ってみたら、命じた人が私になにをさせたかったのか、よくわかったんです。

この、性器をスースーと刺激する感覚がまるで虐められてるみたいで、触られたり舐められたりする愛撫とは全然違うんです。

メンソレータムに犯されながら廊下や鏡の前で露出している間、そのズキズキする乳首やオマ×コを、どうにかしたくて仕方ありませんでした。

（もう、どうにでもして！ この疼いて仕方ない私の上と下のメス勃起、晒して気持ちよくなれるなら、いくらでも晒すから。どんな恥ずかしいことでもするから！）

……そう言いたくなるくらいに。

（メンソレータムっていい……今度またオナニーのとき使おう……）

頭がとろとろのまま、いやらしく浴衣を開いた裸の私が、いまずぐにもぐちやぐちやに犯されたい、という目を、鏡の中からとろんとこちらに向けています。

ああ、この姿を見られたい。

いまこの瞬間、私をオカズにしてオチ×ポをしごいてるフォロワーの皆さんから、何千という視線で犯されたい。

「露出おさんぽで興奮しきったぐずぐずのわんこが、鏡にうつってます…♡♡♡これめっちゃしきゆうにくる…♡♡♡」

このツイートを讀んだフォロワーさんたちに、私の発情ぶりがきちんと伝わるでしょうか。

(こうやって自分の発情をネットで晒すのもまた、別の意味での露出かも……)

そう考えると、この鏡の前でもさらにいやらしいことをして、それを暴露したいという想いが、ふつふつと込み上げてくるのでした。

「さっき生意気に足閉じて立ったせいで、太ももまでぬれてます…♡  
♡ぐちゃぐちゃがにまたわんこ…♡」

いつものがに股ポーズをとると、立ったままがばりと開いた股間に、二本の指を伸ばしました。

「かがみにむかってくばあ…♡」

先ほどの、廊下やエレベーター前でしたときはまた違ったゾクゾク感が、背中を這い上がってきます。

露出して興奮しまくった変態マゾが、その余韻を楽しむために、自分の部屋で、また性懲りもなくがに股ポーズをしてる……。どこまで情けないんでしょうか、私は。

再度の発情を知ったフォローワさんから、次の指示が来ました。

**【お題7…トロトロのオマ×コの愛液を指ですくって、まじまじと見て】**

（あ……糸引いてる……指と指が、ねちやつ、って言ってる）



【お題8…ビチャビチャの愛液を指に付けて、洗面台の鏡に『マ×コ』  
って書いてみたら？ 朝まで消しちゃダメだよ】

(ダメ……ホテルを汚すのは……)

【お題9…指ですくったやつ、自分で舐めてみて。どんな味がする？】

(しょっぱい……生臭くて、いやらしい味……)

皆さんに虐められてるうちに、がに股の腰が勝手に動いて止まらなくなってきました。

（発情ザコメスオマ×コ、もっといじめられたい！）

「このまま立ち手マン想像して、鏡の前でがにまたま×ほじアクメき  
めます…♡♡♡♡♡」

そう打ち込んで送信すると、待ち切れないように股間で激しく手を  
動かしはじめました。

こんなはしたない格好で手マンされるのを想像しながら、自分の指  
で縦割れの亀裂を嬲りはじめます。

くちゅくちゅくちゅ。

ぶちゅっ、じゅぶっ、ずずず。

(あ、あ、あ)

すごい。普段のオナニーと全然違う。

メンソレータムの刺激に性器を犯され、露出プレイの興奮に頭の中まで犯されて。

私はもはや、チヨロくてすぐ堕ちるザコメスマ×コと化していました。

そしてそんな自分をツイッターで晒して、千人以上のフォロワー男子の欲望に晒されながら、妄想手マンされているのです。

電流のような微アクメが何度も何度も背中を上下して、ほとんど立っていられないくらいでした。

ガクガクと震える膝で踏ん張ると、またがに股で背筋を伸ばします。薄く目を開けると、目の前の鏡には、真っ赤な顔で必死に淫部をこすり続ける、変態メス犬が映っていました。

（全国に何千人という私のフォロワーさんが、この姿を見たらなんて思うだろう……。やっぱりわんこちゃんのははしたないメス犬だったねって、馬鹿にしてくれるかも……）

ぞくり。

いままで最高の痺れが背中を駆け上がります。

負けるのが好きで、馬鹿にされるのが大好きな性癖の私にとって、その嘲笑は最高のご褒美でした。

「ホテルの部屋でたったまま変態妄想してアクメするわんこ想像しておかずにしてください…♡♡」

ぐちやぐちやぐちや。

びしゃびしゃ、じゅぷぷつ。

狂ったように手を動かす私の周りは、もうたいへんなことになって

いました。

指を動かすたびにいやらしい雫が辺りに飛び散り、垂れ落ちる愛液が太ももを伝います。

熱い吐息で鏡が曇ってしまいそうでした。浴衣をはだけた女体からメスの匂いがムンムンと立ち上ります。

【お題10…鏡の前のオナニーを、詳しくツイートで実況中継して】

（ダメ、できない。手が震えちゃって、文字なんて打てない……）

頭の中が真っ白に飛んでいて、伝える余裕なんてない！

「ちょっと本気おなにーするからだまります」

なんとかそれだけ送信すると、スマホを放り出してオナニーに集中しました。

鏡の中では、浴衣をはだけてがに股で腰を突き出したメス犬が、くぱぁ、と広げたピンク色の内側を狂ったように掻き回しています。こちらを見ている私は、半分泣いていました。情けなくて気持ち良すぎて、それが死ぬほどうれしくて。

単身出張ホテルオナニー、たまんない！

（あ、イク、これすごい。イク、イク、イグううう）

ばん。

真っ白の頭の中で、何かが弾けました。

「おもいきりいきましまああ…♡♡♡♡♡♡♡♡」

やっと崩れ落ちることを許された私は、へなへなとその場に崩れ落ち落ちました。

もしかしたら隣の部屋から迷惑と思われるくらい、大きな声を出していたかもしれません。





はあはあはあ。

盛大にイった後でも、まだ興奮は治りません。

部屋を出て浴衣一枚で廊下での露出。部屋の鏡にいやらしい自分を映してのがに股の手マン妄想オナニー。

いずれも普段自宅ではできないシチュエーションで、私はこれまでにないエクスタシーを感じていました。

単身で泊まった先のホテル、という非日常の環境だからこそ、ここまで心おきなく感じる事ができたと思います。

ふと、スタスタスタ、と外に足音が聞こえました。

閉じたドアの向こうで、誰かが廊下を歩いています。いままで通り

掛かる人は誰もいなかったのに。

（さっきまで私が露出してたところを、誰かが歩いてる……もし、もう少し戻ってくるのが遅かったら……）  
見られていたのは確実です。

エレベーターの前で浴衣の前をかばりと開いた全裸の女が、がに股で顔をトロかせながら、露出の快感に震えている……。

ギョツとされるだけでは済まなかったでしょう。通報されたかもしれません。いえもしかしたら、その人の部屋に連れ込まれ、朝まで犯されたかもしれません。

「こんな変態には情け容赦は要らないな」と蔑まれながら、口を使わ

れ、お尻をほじくられ、最後は容赦なく中に出されて、まともな人生が終わっていたことでしょう。

あるいは、もし通報されて、私の行為が会社バレたら。

「仕事で出張に行って、会社がとってやったホテルの廊下で、君はいったいなにをやっとるんだ！」

上司から怒鳴られるだけでなく、同僚や後輩からも軽蔑の目で見られるでしょう。

「ホテルの廊下で全裸オナニーしてたんですって。本当はとんでもなく淫乱な変態女性社員だったのね」

「あの先輩のこと、童顔の可愛い顔に似合わずバリバリ仕事ができる人だって尊敬してたのに……幻滅しました」

「今度会社でも、俺ら男性社員の前でがに股オナニーやつてもらおうぜ。案外悦んで腰振ってくれるんじゃないか」

（ああ……）

妄想が広がるたび、またガクガクと腰が勝手に動いてしまいます。いったばかりのオマ×コから、再び熱い淫汁がトロトロとあふれはじめました。

（人生終わっちゃう……みんなから馬鹿にされて、変態と蔑まれなが

ら惨めに仕事して、社内の慰み者として、男性社員さんたちの共用オナホールになっちゃう……)

その場にしゃがんでお尻を突き、私はまたもやその妄想をおかずに、オナニーをはじめました。

廊下の足音だけでこんなに興奮できる自分が、愛しくもあり、どこかそら恐ろしくもありました。

(社会人としての人生が詰んじやうの、たまんない)

今夜何度目かのアクメに、私はピクピクと女体を震わせるのでした。

……ようやくそれも落ち着くと、私はズキズキとする子宮を抱え、洗面台を離れました。

最後にもう一つ、やるが残っています。

いったあと、しばらく放り出していたスマホを取り上げると、フォロワーさんたちに最後のプレイを宣言しました。

**「カーテン開けて窓に向かっておなにーします」**

そう、どうしてもやってみたかったのです。



泊まったホテルの部屋で、窓に向かったの露出オナニー。

でもそれを始める前に、ひとつ準備することがありました。  
バッグの底に隠して置いた包みから、それを取り出します。

歪な形。手のひらに余るサイズ。

どう考えても、普通の女の子が単身出張先に持ってくるものではありません。

**「仕事できてるのに、あなるばいぶもってきました」**

皆さんからの「！」という反響がひしひしと伝わってきます。



私がザコマ×コの変態だと知り尽くしているフオロワーさんたちも、ここまでするとは思ってなかったのかもしれない。

「しっぽのプラグにするかなやんだけど、今日はぼこぼこした形のバ  
イブにしてみました…♡♡こっちのほうがはいりやすいしぼろぼろ  
やすい…♡♡」

そう、持つてるだけで、見てるだけでいやらしいこんなものを、私  
は出張のバッグに忍ばせていたのです。

もし誰かに見つかったら、大騒ぎになったかもしれません。

それを手に、ドキドキしながら部屋の電気を暗くします。

真っ暗にもできたのですが、敢えて薄ぼんやりと周囲の輪郭がわかる程度にしたのは、これからのプレイを楽しみたかったからです。

もし外からこの部屋に目をこらせば、女の子が裸でいやらしいことをしているのがわかる……。

そんなふうにしたかったのです。

その薄闇の中、私は「窓辺に歩きました。カーテンに手を掛け、口から心臓が飛び出そうなほどの鼓動を感じながら、シャツ！ と開きます。

息を吞みました。

正面に、同じくらいの高さのホテルがあるんです！

（もし向かいのホテルの部屋の人がカーテンを開けてこちらを見たら、私の恥ずかしいところ、全部見られちゃう……！！）

慌てて閉めようとして、でも思いとどまりました。

（本当に見られちゃうかもしれない……窓際で変態オナニーをする私が……）

ぞくぞくっ。

痺れるような陶醉感が、再び背中を這いあがります。  
しばらく大人しかった股間が、じんわりと熱を持って潤みはじめる  
のがわかります。膝がガクガクと震えてきます。

もし本当に見られたら……。

晒されたいとか負けたいとか惨めになりたいとか、そんなネットでの  
願望を、リアルに体験することになるのです。

ごくろ、と唾を飲み込んで皆さんにツイートします。

「まどのそとにみえるようにおしりおなにーします」

バイブを手に、カーテンを開けた窓辺に向かいました。  
立ったままガラスに裸体を晒し、持った手を動かしはじめます。

お尻用のバイブですが、ボコボコした形状が前のほうにも十分使えます。

またいつものがに股ポーズをとりながら、私は立ちオナニーしながら皆さんに実況中継をするのでした。

「ばいぶでおま×こにすってべしよべしよにする…♥♥♥♥♥」

もしいま、外から誰かがこの窓を見たら、どう思うでしょう。

薄暗い部屋の中で、女の子が見せつけるように腰をへこへこさせて

オナニーをしている。

しかも手に持っているのは愛らしいラブグッズではなく、醜悪なお尻用のボコボコバイブ。

サカリのついた変態メスマズがヘコヘコと腰を振りながら楽しむ姿なんて、そうそう見られるものじゃありません。

（すごい……知らない土地での見せつけ露出オナニー、たまんない……）

本当に見られたらおしまいだというのに、ぐちゅぐちゅと股間を舐める手の動きを、どうしても止めることができませんでした。

【お題11…窓辺で本当にオナニーしてるんだ？ お尻オナも外に見せつけて、それを実況して！】

それに応えるようとバイブを持ち替え、今度はお尻にあてがいます。

いつもアナルはキュツと閉じていて、昼間の仕事でも存在を忘れていたのに、いまは前のほうがグズグズになったのですっかりほぐれ、すぐにでもボコボコバイブを飲み込んでしまいそうでした。

窓ガラスには後ろ手でお尻を責めようとしている私が映っています。

ふいに、ドバツと音がしそうなほど愛液があふれました。

自分の姿に興奮するなんて、初めてです。

「今度はざこわんがおしりおなにーするところ実況します♡♡♡♡  
おしりもおま×こも男性の皆様のもので、わたしのおなにーに貸  
していただくおれいに実況でお楽しみください…♡♡♡♡♡♡」

暗い部屋でカーテンを開け、私は立ったまま喘ぎ悶えていました。  
浴衣も下着も脱ぎ捨てた女の子が窓に向かって、全裸を晒して外に  
オマ×コを見せつけています。

ぴったり閉じた向かいのホテルのカーテンが、何度もピクリと動い  
たように見えました。

もし本当にそれが開いて、中の男の人がこちらに目を凝らしたら、



それだけで積み上げてきたものが、ガラガラと崩れ落ちてしまいます。  
スマホで動画を撮られて顔でも晒されようものなら、社会人どころか、人としても終わってしまうのです。

なのに、やめられない。

見せつけながら腰を振るのが、気持ち良すぎて。

「まどのそとのみなさーん♥♥♥♥いまこっちみたらぞこまぞめす  
いぬのおなにーしょーがみれますよー♥♥♥♥♥」

そう打ち込んだときの私は、もしかしたらすごくバカっぽい、でも  
世界でいちばん幸せそうな顔をしていたかもしれせん。

快感が絶え間なく続いているせいで、アナルがヒクヒクしているのがわかります。

オマ×コのはうもちろん気持ち良いのですが、せつかく持つてきたそのボコボコを、直腸で味わいたくて仕方ありません。

「そろそろおしりほじくりおなにーします♥♥♥♥」

送信すると、アナルバイブを逆手に持ち、その先端をお尻の穴にあてがいました。

ふっ、と息を吹いて力を抜き、無防備な排泄の穴に、ズブズブと先っぽを沈めていきます。

(あ、これ……すごい……)

いつも部屋でやるときはまた違った感覚が、直腸いっぱいに広がります。

苦しいような、切ないような、他に比べることのできない、鈍痛。でもそれが、じわじわと快感に変わっていきます。この圧迫されるような感覚が大好きなのです。

(ああ、入っちゃう……こんなに、あつさり……)

やはり、自宅でするときとは比較にならないほど、興奮しているせ

いかもしれません。

「すんなりはいました♡♡♡♡」

私が窓辺でアナルバイブを使っているのを知ったフォロワーさんたちから、たくさんのリプライが飛んできます。

「そんなことして大丈夫なの？」

と心配してくれるものもありましたが、ほとんどは無責任に、もつと過激な行為を期待しているものでした。

なぜか優しく気遣われるより、そんなふうになだのオナネタにしてくれているほうが、遥かにうれしいなんて。

本当にどうしようもない変態だわ、私。

【お題12…昼間仕事してたときに、社員証をぶら下げてたでしょ？それを口に咥えて、外に向かって露出アナルオナニーしてみて】

ガツン、と頭を殴られた気がしました。

（そんなこととして、もし本当に見られたら……望遠鏡で覗かれたり、撮影されたあと、ネームプレートを拡大されて読まれたら……）

間違いなく、人生終わっちゃう。

ダメ、それだけはやっちゃいけない。私の社会人生活が抹消されるだけじゃなく、こんな変態マゾメス犬のいる会社にも批判が集まっちゃう。業績不振になったり可愛い後輩が後ろ指を差されたりしたら、みんな私のせい……。

ゾクゾクっ。

頭ではダメだとわかっているのに、その痺れるような背徳感は、強烈過ぎました。

まるで突き動かされるように、私は仕事用のバッグを掴むと、しまつてあった社員証を取り出し、ためらいなくそれを口に咥えて、再び窓辺に歩きました。

ガラスの前で腕を頭の後ろで組み、腰を落として、またがに股に。  
お尻にはアナルバイブが突き刺さったままです。

カーテンを開け放った窓ガラスには、全裸を晒す私の姿が、うつすらと映っています。

女囚みたいな格好で、おっぱいもオマ×コも窓の外にさらけ出し、  
お尻からバイブを生やした、淫乱なメス犬。

口にはスーツ姿の自分の写真を貼った社員証を咥え、切ない瞳でこちらを見えています。

「はだかで、おしりからばいぶぶらさげて、口に社員証くわえて、窓の前で腰へこしますっ♡♡♡♡」

ツイッターの反響はものすごいものでした。ここまでやるんだ！と。

私も、自分がここまでやるとは想像していませんでした。でもいまは、いやらしく腰を振るのがうれしくて仕方ありません。

（これ、いいっ！ 本当にゲスなメス犬になってる！）

あまりに腰をへこへこするので、アナルで咥え込んでいるバイブが抜けそうになります。



(あっ)

ズルツ、と抜けて床に落ちたとき、思わず喘ぎ声をあげてしまいました。

まるで無理やり内臓を引っ張り出されたような、強引な刺激。

床に転がったバイブは、私の直腸液で少しぬめっていました。窓辺に手を突いて大きく脚を広げます。

(お願い、誰かこうやって挿れてるところを見て……)

そう思いながら、またズブズブと差し込んでいきます。

（はああ……また入ってく……）

ブルブルと全身を快感に震わせながら、再びスマホを手に取りました。

「おしりゆるいからばいぶつけたままこしへこするとぬけちゃってきもちいい♡♡さしなおすのもきもちいい♡」

アナルを犯される刺激。

窓辺で外に向かって全裸オナニーを見せつける興奮。

晒した素顔や啜えた社員証から特定されて、身バレしそうなスリル。

それら全部が重なって、私は狂ったように腰振りアナルオナニーを続けました。

「これみられたら人生おわり♥♥♥♥♥」

（あああ、はあああ）

「人生おわっちゃうかもものに窓際でおしりばいぶぶらさげてこしへ  
こおなにーとまんないっ♥♥♥♥♥」

(気持ちいい、最高に気持ちいいよお、これ)

止まらない、止まらない、止まらない。

人生を天秤に掛けた露出アナルオナニー、気持ち良すぎて止まんない！

(あ……)

「いく」

それだけ打ち込むとスマホを放り投げ、ひたすら腰を振りながら込み上げる快感に身を委ねました。

(ダメ、イク、イクううう！)

……気がついたとき、私はその場にへたり込んでいました。  
頭が真っ白になったと思った次の瞬間、意識が飛んでいたようです。  
こんなすごい快感は初めてでした。

(いままでいちばん気持ちよかった……ハマっちゃいそう……)

まだぼうつとする頭で、改めて窓の外に目をやります。

結局、向かいのホテルのカーテンは一度も開きませんでした。

もし開いて、明らかに覗かれ、撮られていたとしても、行為を途中

で辞めたかどうか分かりません。

放り投げたスマホを手にとると、私のオナニー完了に対して、たくさんさんのリップがついていました。

ほとんどが、ここまでやったんだね、と肯定してくれています。少しうれしくなって、続きをツイートしました。

「人権よりきもちいの優先しちゃうまぞめすわんこのおなにーしょーおたのしみいただけましたかああ」

また、どつとリップ。

最近、飽きられてきたかなと感じていたところだったので、素直に

うれしく感じます。

皆さんになにか御礼がしたいな。

そう思って、もう一度裸のまま、スマホを手に窓辺へと歩きました。

さつきと同じように全裸を外に晒して脚を広げ、腰を落として、何度目かのがに股のポーズ。

股間をぐいっと突き出すと、余韻でぐずぐずに蕩けたままのオマ×コを、くばあ、と窓ガラスの前で開きます。

「しあげに今日露出おなにーであくめした変態ちよろまぞめすいぬわんこのおま×ことおしり、ひろげてまどのそとにさらします…♡♡♡

♥♥みなさまにとどけっ…♥♥♥♥」

指でぱっくりと開いたオマ×コが、奥の奥、穴の入り口まで晒されているのがガラスに映っています。蕩けた粘膜は名残惜しげに、タラタラと愛液を垂れ流し続けていました。

ガラスの私は、幸せそうなアへ顔をしています。

こんなにも人として最低な行為をして、それを皆さんに喜んでいただいているなんて。

まさに変態メスマゾ冥利に尽きます。

後ろを向いて、腰を突き出しました。窓に向けてお尻をぱっくりと



開きます。

自分からは見えませんが、きっとバイブを飲み込んだケツ穴は、物欲しそうにヒクヒクしているでしょう。

（オマ×コも……お尻も……こうやって外に晒して喜んでる私……）

いま、とても幸せです。

こうやって、どうしようもない私を受け入れてくれるフォロワーの皆さんに感謝しなきゃ……。

これからもずっとずっと、皆さんに使ってもらえるオナホールとして生きていかなきゃ……。

またスマホを手にとると、いまの思いをツイートします。

「これからおなほわんこはいつでも使われるの楽しみに生きていきます…♡♡♡」

「わんこのざこまぞめすいぬおま×こも、ゆるゆるふわとろへんたいあなるも、みなさまの公衆おなほです、ゆずりあってお使いください…♡♡♡」

もし同じ会社の同僚や先輩後輩、今日の出張で一緒に仕事をした人たちが、オマ×コもお尻もドロドロの私を見たら、どう思うでしょう。

自分で言うのもなんですけど、優秀さを買われて単身で出張に来て泊まったホテルで、こんなにも変態行為をことをしてる私の、昼と夜のギャップの激しさときたら。

さすがにぐったりと倒れ込んだベッドの上で、私は気持ち良い余韻にうとうとと浸っていました。

もう動けません。このまま眠ってしまいそうです。

でも、その前に。

皆さんに、もうひと言だけ。

「露出おなにー気持ち良すぎていまベッドに倒れ込んだので、いまほてる特定してへやとついたらいいぶしほうだいですよ」

本当に誰かがホテルの部屋を突き止めてくれて、ぐったりしている私を好き放題犯してくれたらいいのにな……。

そんな幸せな妄想に浸りながら、私は深い眠りに落ちていきました。

(了)